献　　春

令和八年元日

コスモス短歌会

歌の周辺

昭和60年の作。「音叉鳴るしづけさに似てヒヤシンス水中に白き根が繁り合ふ」に続いてこの歌があり、卓上のガラス容器にヒヤシンスを入れて鑑賞していたのだろう。私は白秋の「ヒヤシンス薄紫に咲きにけりはじめて心顫ひそめし日」の歌が好きなので、「白秋のヒヤシンス咲き」と表現した。この年、私の母が亡くなり、また勤め先の仕事も忙しかった。妻は二人の娘を抱え、長女は高校受験を迎えようとしていたので、やはり忙しかった。そんな状況を「妻四十われ四十三おのおのの生」と表現してみた。

（高野公彦）

（写真・木畑紀子）

高野公彦うた紀行・46

白秋のヒヤシンス咲き妻四十われ四十三おのおのの生

――『雨月』

【鑑賞】静かに展開していく一首だが、感情的なふくらみに富んでいる。上句の「白秋のヒヤシンス」は、初恋を詠んだ北原白秋からの引用を端的に示している。その後、妻と自身の年齢が示されることで、青春時代から四十代の現在までの経緯が立体的になり、同時にさまざまな思いがあったことを読者に暗示する。ロマンチックを語るのに、多弁は不要と知らされる。（宮　梓一）

ふるさとコレクション――217

東京スカイツリーとふれあい橋（東京都江戸川区平井）

東京の東部にある江戸川区平井は大きな荒川と小さな旧中川に四方を囲まれた不思議な地形の町である。しかもこのふた筋の川の土手がどちらもコンクリートではなく土。こんな町は少なくとも東京ではここ平井だけではないだろうか。

広々とした河川敷のある荒川もいいけれど，ここでは旧中川を紹介したい。十種類以上の鳥が遊び，葦が風に鳴り，鯔が跳ね，春には河津桜や染井吉野の花が咲くこの川の土手で過ごしていると心がゆったりして歌もたくさんできる。

この旧中川にかかる人道橋（じんどうきょう）がふれあい橋。ここに立つと真正面にスカイツリーが見える。この写真では小さく見えるが実際はとても大きい。風のない日にはその姿がくっきりと川面に映ってすばらしい眺めになる。

更にすごいのは日没時だ。ライトアップが始まったスカイツリーの背後が夕焼けで茜色に染まるのである。もちろん川面も茜色。まさに絶景だ。写真や動画を撮るのが好きな人もそうでない人も，風のない日の夕方を狙ってぜひ来て下さい。

（写真・解説：前中　　映）